

土佐のわらべ

第371号 《第393回（2012. 4. 12）子どもの本の読書会記録》参加者4名・文書参加3名

『ハティのはてしない空』

カービー・ラーソン／作 杉田七重／訳 鈴木出版

西部開拓時代、第1次世界大戦中のお話です。

主人公のハティは、幼くして両親を亡くした16歳の少女。親戚を転々とし、今は、血のつながりの無いアイビーおばさんと遠い親戚にあたるホルトおじさんの家で暮らしています。そんなハティに思いがけない手紙が届きました。それは、存在さえ知らなかった伯父さんからの遺言状です。遺言状の内容は、「モンタナで申請した土地の払い下げ請求の権利」、「家と家財の相続権」などをハティに託すというものでした。

ハティはたったひとりで、土地の所有権を夢見て入植します。

物語の背景となるのは、1862年に成立したホームステッド法。アメリカ西部の未開拓の土地を、特定の条件を満たしたものに無償で払い下げるといふもので、ハティはおじさんから開墾途中の土地を引き継いだのです。

けれども、その土地を自分のものにするには、たった10ヶ月で、少なくとも東京ドーム3個分の土地を耕し、作物を収穫し、境界に480本の杭を打って柵をつくらなくてははいけません。「来年の地」とよばれる過酷な西部の土地開拓…。そして、ハティが戦わなくてははいけないのは、過酷な自然だけではなくありませんでした。偏見、差別、病気…。最後はハッピーエンドとはいいがたいのですが、未来への希望につながり、納得できます。

今回読書会に参加したメンバーの意見も、久々に読みごたえのあるいい作品だ、というものでした。

読みごたえがあった。軽く考えていたが徐々に手ごたえを感じた。寒さも暑さも半端じゃない土地で少女がひとり。周りの大人には恵まれているけれど、あまりにも過酷。少女の成長物語というにはあまりに濃く、凝縮されていると思う。

モンタナの自然の厳しさがすごくよく分かる、自分たちとは比較にならない過酷な生活。手の表現が出てくるたびに自分の手と比べてしまった。

ハティの前向きな気持ち、回復力の早さ、精神力の強さに感動した。

人は、心の持ちようで居場所はある。周りの人物がよく描かれている。すっきりした。納得できた。

物語の構成も面白いし、読みごたえもある。

登場人物すべてが個性豊かで、時代が違えば、考え方も付き合い方も違っていただろうなと思った。

人と人との繋がりに感動した。また、人の醜さに憤りを感じました。

過酷な自然の前に私たちはあまりにも無力です。けれど、そんな自然の中で、人とふれあい、助け合い、支えあって立ち直れる精神の強さがあるのも私たち人間です。生きていくことの大変さと素晴らしさを教えてくれる本です。

なお、この作品は、2007年ニューベリー賞オナーブックに選ばれたほか、2006年モンタナブック賞などを取っています。

(S. K)